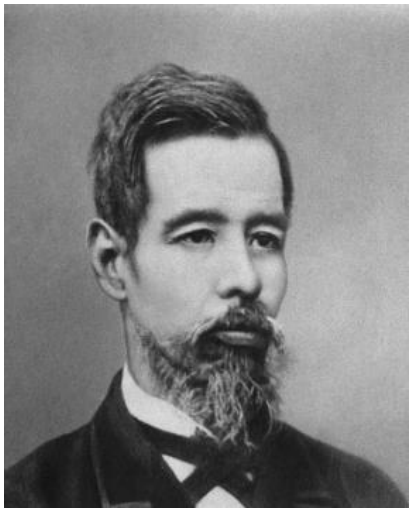
カミソリ大臣『陸奥宗光』とワシントン社交界の華『陸奥亮子』

2024 年 9 月 10 日

我部山　民樹

1.　はじめに

陸奥宗光



陸奥亮子

陸奥宗光は明治期の外交官、政治家で、位階勲等爵位は正二位勲一等伯爵。

宗光は和歌山紀州藩士で国学者の伊達宗広の六男として生まれる。幼名は牛麿（うしまろ）。幼少期に父親・宗広が、勘定奉行に取り立ててくれていた藩主が死去したことにより失脚したため、一家は城下を追われ、生活は困窮したが、苦難を乗り越え海援隊の坂本龍馬に出会う。龍馬に認められ、海援隊の商事部門を任されてから頭角を顕し、仕事を通して土佐藩の重臣・後藤象二郎らの知遇を得たうえ、その信頼を勝ち得た。将軍慶喜が大政奉還した後の混乱の中、鋭敏な触角をはたらかせた宗光は、1868 年 1 月 1 日、後藤の紹介状を携えイギリス代表である通訳（のちに外交官）・のアーネスト・サトウ（＊1）や公使・パークスを訪れ、外国公使らが天皇を押し立てる新政府を承認するための手続きについて質問し、王政復古の宣言方法についての自説を述べ、彼らの同意を得た。即刻「王政復古の布告宣言をする」ことを公卿の岩倉具視（王政復古後に議定に就任する）に提案した。岩倉らはおおいによろこび、その提案を採用し、1 月 3 日、天皇により勅令「王政復古の大号令」（＊2）が発せられた。

岩倉具視の推挙で宗光は官吏となる。藩閥出身者で牛耳られていた明治政府の中で官僚として活躍する。会計権判事のとき、甲鉄船ストーンウオール号のアメリカとの引き渡し交渉では、その手際の良さが世間で話題となり、大坂歌舞伎の中村鴈治郎が芝居にした。

やがて政治家に転身して中米公使等を経て、やがて外務大臣に就任する。政治家として縦横無尽の活躍をし、外務大臣として不平等条約の撤廃に成功する等、日本の近代化に辣腕を振るうことが出来たのは、類まれな才能を持ち合わせていたからであろうし、その才能を理解してくれる人脈に恵まれたからであろう。

官僚のときには自分の上司として認める人物には従順に従うが、認めない上司には命令を無視するとか辞表をたたきつけることもあった。もし辞表を受けとられてしまうと浪々の身となり、官僚としての前途がとざされてしまうことも顧みない叛骨な面もあった。政界に入ってからは、機略に

富んだ資質から「カミソリ大臣」とも呼ばれた。これは単に「頭が切れる者」という意味だけではなく、使い手の技量が問われ、使い方を間違えるとケガをするという意味も込められていたとされる。それにも関わらず坂本龍馬の海援隊,官界や政界で活躍できたのは、その類稀な才能を持ち合わせたことが前提であるが、その才能を認めて宗光を重用した土佐出身の勤王志士・坂本龍馬、土佐藩重臣・後藤象二郎、長州出身の内務卿木戸孝允（西郷隆盛、大久保利通と維新の三傑の一人）や長州出身の初代総理大臣・伊藤博文らのよき理解者に巡りあえたからであろう。

宗光が元老院の仮副議長のとき、土佐立志社の政府転覆計画に加担し、大隈重信や伊藤博文らの政府要人の殺人計画を画策するなどで投獄されたが、官界や政界に復帰して大活躍した。われわれ凡人が思い及ばないほどに複雑な性格で類まれな能力の持ち主なのだろう。

その妻亮子は、旗本・金田蔀（しとみ）の妾との間で生まれ、新橋にある柏屋の芸者となり、小鈴（小兼）の名で通っていた。板垣退助に愛された小清（こせい）とならんで「新橋の双美人」と呼ばれ、新橋で一、二を争う美貌の名妓だったという。宗光と亮子の馴れ初めのほどは史料に残されていない。（小説としては大路和子著『相思空しく』にある。）

亮子は結婚後に英語・文学・歴史などを猛勉強して夫の片腕として活躍しながら社交界入りするが、その並外れた美貌に加え、聡明さと優雅なもてなしで「鹿鳴館（＊3）の華」とか「ワシントン社交界の華」とか呼ばれた才女である。

2．主な出来事

年　月	陸奥宗光関連の主な出来事	陸奥亮子関連の主な出来事
1844 年 天保 15 年	宗光、紀州藩士・伊達宗広と政子（第 10 代和歌山藩主・徳川治宝の側用人渥美勝都の長女）の六男として生まれる。幼名は牛麿（うしまろ）	
1852 年	父・宗広が失脚。 宗広は藩主徳川治宝（はるとみ）に引き立てられ財政再建をなした重臣（勘定奉行）であったが、宗光が 8 歳のとき藩主・治宝の死により失脚したため、一家には困苦と窮乏の生活が訪れた。和歌山城下を追われ、数年の間紀ノ川上流で何度か居所を変え、伊都郡入郷村に落ち着き、高野山の荘官（荘園の現地管理をまかされた者）である岡左仲の世話になる。	
1856 年 安政 3 年		11 月、亮子は旗本・金田蔀（しとみ）昌武と妾との長女として江戸に生まれる
1858 年	伊達小次郎（陸奥宗光）、高野山江戸在番所の寺男として江戸に出る。生活に困窮し、筆耕等により口を糊すること三年、儒学者の安井息軒（飫肥藩士）に師事し、また律令学者の水本成美（薩摩藩士、法制官僚。元老院議官）の塾に入る。後、長州藩士の桂小五郎（木戸孝允）・	

	伊藤俊輔（伊藤博文）、土佐藩士の板垣退助などの尊王攘夷の志士と交友を持つようになる	
1863 年	（このころ尊王攘夷の志士が宗広の見識を知り、その意見を聞くために、実家を訪れることがあった） •坂本龍馬が勝の手紙を携えて、宗広を訪れて紀州からも海軍操練所（海軍塾）への入塾を勧めたが、そのときに出会った宗広の息子・小次郎（陸奥宗光）に入塾を勧め、小次郎が入塾。 ・小次郎は入塾後、海軍塾の塾頭の**龍馬に私淑**（密かに尊敬し、模範として学ぶ）、また、蘭学者の広瀬元恭（甲斐国（山梨県）の医家に生まれる。15 歳のとき江戸に出て、坪井信道の塾日習堂で蘭学を学び、塾頭も務めた。さらに一時緒方洪庵の塾にも入ったが、まもなく京都で時習堂を開き、医業と蘭学を教授した）の時習堂にも出入りする。 　小次郎は海軍塾では「弁舌が立つ才子（才知にすぐれ、頭の働きのすばやい人）であるが、軽薄な口舌の徒（言葉は達者であるが実行力の伴わない人）」と思われ、「嘘つきの小次郎」と陰口をたたかれた。 　勝海舟が談話録・氷川清和の中で「同輩の評判は甚だ悪く‘嘘つきの小次郎’と言われていた」と書いている。（葉室麟の著書『暁天の星』によると、「大藩の紀州藩の重臣の息子が脱藩して尊王の志を果たそうとしていることが嘘に違いないと思われた」と） ・いくつも改名したが、葉室麟の著書『暁天の星』によると「このころ、陸奥陽之助に改名、姓は伊達と同じ東北の陸奥にした」とある。 最終的には陸奥宗光と称した。以降この中では陸奥宗光に統一する。	
1864 年	神戸海軍操練所が、幕府の機関でありながら反幕府的な色合いが濃いとして解散させられた後、宗光は錦戸広樹の変名で薩摩の家老・小松帯刀に抱えられる （津本陽著;荒ぶる波濤によれば、操練所解散を予測	

	していた勝が「龍馬ら浪人の塾生が幕吏にひっ捕らえられることを懸念し、薩摩藩の家老・小松帯刀に面倒を見てもらうように頼んでいたので、帯刀に抱えられた」と）	
1865 年	・宗光は龍馬（土佐藩士で脱藩して志士として活躍）や薩摩藩家老・小松帯刀（幕末の薩摩藩の支柱として活躍した）、西郷隆盛（土佐藩の下級武士、明治維新の立役者）とともに大阪から鹿児島に向かう。 （津本陽著『荒ぶる波濤』では、「この頃、小次郎（宗光）は名前を陸奥源二郎と変えていた。伊達を陸奥と変えたのは、後者の方が大きい印象を感じると思いついたためである。長崎に着いて間もなく、源二郎を陽之助と名を改名した」としている） ・その後宗光は**坂本龍馬らにより結成された亀山社中**（長崎で結成された浪士結社・貿易結社、間もなく海援隊となる）に加わる。 海援隊には、土佐の澤村惣之丞、佐々木高行、長岡謙吉、坂本直（龍馬の甥）、中島信行（のちに宗光の義弟となる）、近藤長次郎、越前の関義臣、岡谷耕蔵（伊呂波丸船長）、紀伊の陸奥宗光らがいた。海援隊宿舎の居候として土佐の中江兆民もいた。） 宗光は錦戸太郎の変名で長崎の何礼之（がのりゆき＊4）の長崎英語伝習所の門人となる。また、長崎の亀山に滞在中、一外国人宣教師の家に住み込み、その夫人から英語を教授されたとされる	
1866 年	2 月、宗光が長崎での近藤長次郎（高知城下の饅頭屋の息子で、幼少より聡明であった。その才を認められ名字帯刀を許され、種々の遍歴を経て海軍塾に入ったが、勝が失脚し海軍塾が閉鎖された後、亀山社中（海援隊）に加わった。このとき内密にイギリス留学計画を進行していたが発覚し、亀山社中の社中盟約書に違反したとして仲間たちより追及を受けたのち、責任をとって小曾根乾堂邸で切腹した）自裁の報を京都に伝える。 ・3 月、宗光が鹿児島に向かう龍馬の船に同乗し長崎に帰る。	

	・5 月、寺島宗則（このとき薩摩藩遣欧使節団に参加していた、のち第 4 代外務卿として活躍した。日本の電気通信の父と呼ばれる）が上海から鹿児島の阿久根まで乗った帆船に宗光が船員として乗船している。 ・宗光は、この年後半から頭角を顕し、亀山社中の土佐出身者たちのグループの主要メンバーとなる	
1867 年	・宗光、龍馬の海援隊（1867 年から 1868 年 までの間、私設海軍 ・貿易など、 薩摩藩 などからの資金援助も受け、近代的な 株式会社 に類似した組織で物資の運搬や貿易の仲介などの商社機能もある）に加わり意見書「商方之愚案」を提出、**これを龍馬が高く評価した。**このころ兵事にたずさわる隊士と商事部門にたずさわる隊士を分けたが、その**商事部門を龍馬に任された宗光**が外国商人からの武器買付などを行うようになる ・5 月 26 日、龍馬や宗光ら海援隊士が、小銃と弾薬を輸送する必要があった土佐藩の**後藤象二郎**(＊5) **に頼まれ**、後藤が大洲藩より借与していた蒸気船「伊呂波丸」に乗り込み瀬戸内海を航行中に、紀州藩の軍艦「明光丸」と衝突。曳航中の「伊呂波丸」は鞆の浦までたどり着くことなく沈没。 坂本龍馬、宗光らの全海援隊士は無事に明光丸に移乗し、死者 0 人。この事件で龍馬が万国公法（国際法の解説書）を持ち出し、小銃弾薬等の積み荷と船の弁償として紀州藩から多額の賠償金をせしめた。（伊呂波丸沈没事件）（最近になり沈没した船を探査した結果、高価な小銃類は積んでいなかったとされている） ・宗光、難波新地の芸妓であった蓮子夫人と結婚、長男広吉、次男潤吉を儲ける ・11 月 15 日、坂本龍馬が京都の近江屋で、暗殺される。そのとき宗光は外泊していたが、連絡を受け龍馬の死を知り、いそぎ戻って龍馬の亡きがらにすがって号泣したとされる。宗光は唯一の後ろ盾を失ってしまう。	

	後年、宗光は「西郷どんは確かにときの英雄かもしれん。だが頭が固い。それに比べて龍馬先生は、融通変化の才に富む。自由自在の人だ。大空を駆ける奔馬だ」だと言っているが、それほどに龍馬を心酔していた。 ・12 月 7 日、龍馬暗殺の黒幕が紀州藩士の三浦休太郎との噂を信じ込み、三浦を襲う天満屋事件（＊6）を起こした。（現在では会津藩の反幕勢力からの治安維持の組織・京都見廻組が犯人とされている）この事件後、宗光は行方をくらましたが、**後藤象二郎のもとに潜んでいた**とされる。	
1868 年	・1 月 1 日、イギリスの外交官アーネスト・サトウと懇意にしていた**土佐藩の後藤象二郎の紹介状を携えて**、宗光は大坂のイギリス公使館にアーネスト・サトウを訪ねて新政府の承認問題について意見交換を行った。宗光が「皇族の一人が大坂城内で外国公使と会見し、王政復古の布告を宣言することを提案」、サトウの賛成を得ると、即刻これに基づく意見書（＊7）を維新後に議定（ぎじょう、王政復古で総裁, 議定、参与の三職が設置された）に就任する岩倉具視に提出。 ・1 月 3 日、京都御所に手明治天皇より勅令「王政復古の大号令」を発す。 ・このごろ岩倉具視の推挙により外国事務局御用掛に任命される。 イギリス公使ハリー・パークスを通じ、宗光を新政府の重職につけようとした**後藤象二郎の工作が、功を奏した。後藤は「わが耳目にしたいと願ったほど、英語の知識に長じているとともに、天下の形成を察する鋭敏な触角をはたらかせる宗光を高く評価し**ていた。（津本陽の著書『叛骨　陸奥宗光の生涯』（津本陽著「叛骨」より） ・明治維新に踏み切った新政府が、王政復古を朝鮮政府に通告する書契を発送した。しかし、朝鮮政府は西界の格式が以前とは違うという理由で受付を拒否した。（朝鮮側からしたら欧米の真似をしている日本のことは気に入らず、さ	

	らにその当時の朝鮮の親玉である清と同じ感じのする手紙を送ってきたことが気に入らなかった)。すると日本では朝鮮を征伐しなければならないという主張が提起されたが、これを「征韓論」という（武力によって無理矢理、李氏朝鮮という国を開国させようという考え方） ・3 月、宗光が外国事務局権判事に任ぜられる ・4 月、宗光は門閥、藩閥に不満がこみあげてきて辞表（＊8）を提出。しかし政府は黙殺し、外国事務局権判事の職に加え、会計官権判事就任を命じる。 　会計官権判事宗光が、戊辰戦争に際し局外中立を盾に甲鉄艦として知られる新造のストーンウオール号の引き渡しを拒否していたアメリカとの引き渡し交渉に成功、その際、未払金十万両（五十万両のうちの残り）があったが財政基盤の脆弱だった新政府には支払えなかった。会計官権判事の宗光が海援隊の交易事業のときから密接なつながりを保っていた大阪の商人らに、協力してくれたら金利のほかにしかるべき報償を与えると説き、一晩で借り受けることに成功、宗光なら何とかしてくれると期待し会計権判事に任命していた新政府の首脳陣ではあるが、期待以上のその手腕に驚き、おおいに感嘆した。 　また水際だったかけひきが世間の話題になり、大坂歌舞伎の中村鴈治郎が芝居にした。 　・6 月、カミソリの切れ味をあらわした宗光が大阪府権判事に任命される。このとき兵庫県知事であった**伊藤博文を度々訪ね、時には知事邸に泊まり込み、版籍奉還、廃藩置県など「国家将来の大計」を論じあい、親密な関係を結ぶ**	
1869 年 明治 2 年	1 月、宗光が摂津県知事となる 6 月、宗光が兵庫県知事となる。何礼之から英語教師として星亨（＊9）を紹介される	
1870 年	・3 月、宗光が刑部省小判事に任ぜられるが、和歌山藩欧州執事として渡欧することが既に決定していたため、即日依願免職の手続きを取ったが、土佐時代からの知遇である参議・	

	刑部大輔佐々木高行の不興を買う。 ・9 月、宗光が和歌山藩欧州執事として渡欧し、藩軍事顧問ケッペンの依頼により、プロイセンから軍事教官数名を招聘する契約を交わす	
1871 年	5 月、宗光がアメリカ経由で帰国。和歌山藩戍兵都督心得、権大参事に任命される。 ・8 月、廃藩置県を受け神奈川県令として再度出仕。 　宗光は徹底したリアリストであり、横浜港に停泊中のマリア・ルス号（ペリー船籍）内の清国人苦力を奴隷であるとして日本政府が解放した事件のような人道的な問題には関心がなく（冷たく）、自らはこの件に関わることを固辞し、県参事だった大江卓に対応を任せ、県令を辞任する。 ・そして地租改正問題に専念する。また、伊藤博文や井上馨と異なり朝鮮の近代化には全く関心がなく、朝鮮への投資に見合う担保を気に掛けていた。 ・宗光が星亨を大蔵省租税寮御雇に抜擢する	
1872 年 明治 5 年	・2 月、宗光の夫人・蓮子が亡くなる ・8 月、宗光が地租改正局長に就任 宗光の義弟（妻の初穂は宗光の妹）で横浜税関長官の中島信行が租税権頭に就任し、宗光を補佐。星亨が税務次官として中島を補佐する	・亮子が東京新橋にある柏屋にて 17 歳で芸妓となる。 （芸者の修行をしながら下働きを 3 年、12 歳で半玉、そして 17 歳で芸妓となり、小鈴(小兼)の名で客前に出た）自由民権運動の指導者として東アジアで初となる帝国議会の樹立に向けて活動し、「国会を創った男」として知られる板垣退助に愛された小清（＊10）とならんで「新橋の双美人」と呼ばれ、新橋で一、二を争う美貌の名妓だったといわれる。 ・5 月、亮子が宗光に見染められて 17 歳で後妻となる。ごく内輪だけの祝言だった。後日、宗光の母の政子、妹の初穂とその夫・中島信行に引き合わされる。
1873　年 明治 6 年	・6 月、宗光が大蔵少輔に就任 ・宗光は薩長藩閥政府の現状に不満を抱き、**木戸孝允への接近を通して**、薩長勢力の一角に楔を打ち込もうとする。	・亮子に長女清子（さやこ）が生まれる

	・宗光は木戸孝允に対し自らの上司である大蔵省事務総裁大隈重信を「経済に通ぜず、吏務を解せず」として罷免を求める。このごろ大隈が口舌の徒に過ぎないという見方は、政界にひろまっていた。 ・10 月、朝鮮に使臣を派遣する問題で対立した征韓論争(＊11)で、政争で押された西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎、江藤新平、副島種臣らが下野し、大久保体制が確立して、新たな参議として大隈が大蔵卿、寺島宗則が外務卿、伊藤博文が工部卿に就任する。 （この政変で，大隈重信に引退を勧める話は立ち消えとなる）	
1874 年	・1 月、宗光は薩長藩閥勢力による政権の独占を批判した**「日本人」(＊12)と題する論文を木戸孝允に呈し、宗光は官を辞する。**(「日本は日本人の日本である。薩長の日本ではない。日本人という意識を抱く者が政権を担うべきだ」という主張)	
1875 年	2 月 11 日に政府の要人である大久保利通・木戸孝允・板垣退助らが大阪府に集い、今後の政府の方針（立憲政治の樹立）および参議就任等の案件について協議した会議（大阪会議）で、大久保と民権派が妥協し、**木戸・板垣の推挙により、その一環で設置された元老院議官に宗光が就任。**（津本陽之著書『荒ぶる波濤』では、「このとき陽之介を改名して宗光と称した」としている。） その後幹事となるが、元老院の実権は徐々に削られた。	
1877　年 明治 10 年	・１月、西南戦争勃発。このとき、宗光は元老院仮副議長であったが、和歌山からの募兵を募ることを献策。 ・4 月、宗光は岩倉から依頼され大阪に向かう。これは増援部隊として派遣されることによる戦後の宗光の発言権強化と、状況によっては西郷隆盛（さいごう たかもり）らが起こした西南戦争に加勢するべく活動していた土佐立志社の反乱軍と合流する両にらみの戦略を謀っ	

	た。 宗光は大江卓、岩神昂と共に即時挙兵と**大隈重信や伊藤博文などの政府要人の暗殺計画**（＊13）を画策する（発覚後に伊藤博文は自分も暗殺計画に含まれていたことを知っていたとされる）。しかし、4 月 15 日、熊本城連絡路が開かれ政府軍の優位が明確になり、立志社の挙兵計画も遅滞したため、計画に見切りを付け、29 日に大阪を立ち東京にもどり大江に計画の中止を説く。 ・5 月、木戸孝允が死去。 ・8 月、林有造と岩神昂が政府転覆容疑で逮捕される	・亮子は、**長州閥の中で伊藤博文以外に、宗光の政治的才能を信じ、親身になって引き立ててくれていた木戸が死に**、宗光がこれまで以上に孤立無援になると案じた。
1878 年 明治 11 年	・5 月 14 日、初代内務卿（事実上の初代内閣総理大臣）の大久保利通が紀尾井坂付近の清水谷（千代田区紀尾井町）にて石川県士族島田一郎ら 6 人に殺害される（「紀尾井坂の変」と呼ばれている）。 ・5 月 15 日、大江卓、岡本健三郎が政府転覆容疑で逮捕される。（立志社の獄） ・6 月 10 日、宗光が逮捕され収監される。 ・8 月 20 日、宗光が大江卓（海援隊士、のち宗光に引き抜かれ神奈川県参事に就任）らの政府転覆計画（＊14）を承知していたこと。岩神昂より政府重臣の暗殺を謀ることを聞き、暴挙の勢いで政体を改革せんとした。大江に元老院の暗号を用いて挙兵の秘謀を通信させ、大阪に出向いて大江の下阪を待った。このようなことで禁錮 5 年の刑に処せられ、山形監獄に収監される。 　立志社の指導者の板垣退助や後藤象二郎の逮捕までには至らず、これで終息した。 ・11 月、太政官が宗光の従四位の位階を剥奪すると、**伊藤は直ちに右大臣岩倉具視に抗議の書状（省略）を贈る**。岩倉より「史官の不都合によって行き違いがあり、あのような結果になったが、位階はもとの通りにつけられるように（宮中職の）土方（久元）が手配りします	・亮子は、夫・宗光の友人の津田家に身を寄せて姑の政子に仕え、子育てをしながら獄中の宗光を支えた。亮子は宗光からたくさんの手紙をもらっている。（うるさいほどの忠告も） ・夫婦ハ道づれの旅人なれば晴雨寒暑必ず相共にすべく、このことハ同居いたし候も相別れおり候も決して相違なき事ニ候（夫婦とは人生の旅人だから、晴雨や寒い暑いもともにすべきで、このことは同居していても変わらない、というのだ） ・暇なおりがあるようだったら、新聞を読むように ・新聞紙ハ東京日々新聞がよろしかるべし。小新聞ハ格別の益なし ・小説では『八犬伝』などを読んではどうか ・毎日一度ヅ々、必ズ運動被成候（なさ

	ので、そのようにお心得ください」と返書している。	れそうろう)。又おりおりハ上野の公園などを歩行するもよし（亮子が運動嫌いなのを承知したうえで） ・御互いニまだ二十年はいき申すべくまま、行末をたのしみ今日之不自由をおしのび可被成候。
1879 年	・12 月、宗光が山形よりも温暖で安全な宮城獄に転獄する。**伊藤内務卿が県令に親展状を贈り、宗光を転獄し法規の許す限り便宜を図るように内命**。 ・古川市兵衛商店の木村長七が宮城県監獄に行き宗光に面会したが、宗光の病室は、縁側に着いた八畳間で次の間に国事犯三浦介雄がいた。縁先に二～三寸角の格子戸が打ち付けられてあった。（「木村長七自伝」より） •宗光は宮城監獄で読書執筆に励んだ。『面壁独語』を脱稿し、『福堂独語』、『資治性理談』の著述をしはじめる。	・3 月、亮子は、東京曙新聞の宗光に関する記事「…昨年の暮れより、吐血して即今衰弱甚だしい故…」を見て驚く。宗光が亮子を心配させまいとして手紙には「心配に及ばず候」と書いてきていたことを知る。 ・9 月、報知新聞に「強盗犯が脱獄するために放火したことにより山形監獄が炎上。宗光も焼死」の報が出たことを亮子が知り驚く。夜遅く誤報だと知る。 ・宮城獄の宗光より二篇の七言絶句の漢詩が送られてきた。一篇は、南北に別れながらも夫婦の心は同じだと読んでいる。もう一篇は読み下すと、「夫婦天涯別れて幾春ぞ、**相思空しく**覓む（とむ）夢中の真…」亮子が分身の術を得て獄中に訪ねて来るという思いの詩であった。
1881 年	・10 月、板垣退助、自由党を結成。総理に板垣退助、副総理に中島信行、常議員に後藤象二郎ら、幹事に林正明らが就任 ・10 月、参議大隈重信が明治政府中枢から追放される。自由民権運動が勃興する中で発生した「開拓使官有物払下げ事件」（＊15）に端を発した事件であり、大隈重信が下野する。開拓使長官の薩摩閥の黒田清隆が参議および開拓長官を辞職し、内閣顧問の閑職に退き、これ以降政府の中心は長州閥の伊藤博文となる。（「明治 14 年の政変」といわれる） 大隈自身は後年の『大隈侯昔日譚』において関与を否定しているし、大隈の回想には、「岩倉が 1883 年に没する直前に‘薩長政治家にあ	

	やまられて、我が輩（大隈）を退けた事を悔ひ’、謝罪した」とある。	
1882 年	・大隈重信が立憲改進党を設立。三菱の岩崎弥太郎が強力に後援していたとされる。 ・伊藤がドイツ、オーストリアで憲法調査を行うために渡欧する。	
1883 年	・1 月、宗光が八ヵ月の刑期を残して、特赦で出獄を許される。 ・6 月、板垣と後藤一行が約 7 カ月の洋行を終えて帰国する。 ・7 月、鹿鳴館が完成する。 ・8 月、1 年余りに及んで渡欧していた伊藤が帰国する。 ・11 月、鹿鳴館で 1200 名を招待して落成の祝宴が行われる。以後、国賓の接待、夜会、舞踏会や演奏会が頻繁に催されたが、皇族や上流婦人の事前バザーも重要な催しとされ社交場として賑わうことになる。	
1884 年	4 月、宗光、**伊藤博文の勧めもあり留学のためにヨーロッパに出立する。**これからの日本国家の仕組みを決めるために欧州の近代社会の仕組みを学ぶことが目的であった。(留学は宗光の大事な子分の中島や星が入党している自由党からの強い勧誘を振り切る意味もあったとされる)。宗光は西洋近代社会の仕組みを知るために猛勉強する。ロンドンで宗光が書いたノートが 7 冊現存している。内閣制度の仕組みや議会の運営方法等について、民主政治の先進国イギリスが長い年月をかけて生み出した知識と知恵の数々を盛んに吸収し、ウイーンでは法学者で思想家のローレンツ・フォン・シュタインの国家学を学んだ。	・6 月、わが国で初めてのバザー「婦人慈善会」が開催される。盛況で売上金 8 千円は看護養成所設立のために寄付された。
1885 年 明治 18 年	伊藤博文が初代内閣総理大臣に就任する	・11 月、4 月のバザーに続き慈善会が開催され、皇太后、皇后両陛下の行啓があった。亮子は伊藤博文の夫人・伊藤梅子（＊16)に頼まれて慈善会に参加するが、亮子の美貌は注目の的となり、やがて伊藤梅子や井上馨の妻・武子らに勧誘されて舞踏会に参加するようになる。

1886 年	・2 月、宗光が一年九ヵ月に及ぶヨーロッパ留学を終えて帰国し、外務省に出仕する。 ・この頃**伊藤は宗光にしきりに官途に就くように勧める。** •宗光夫妻、アーネスト・サトウに会う。	・亮子は更なる努力をし、英語・文学・歴史・ファッション・テーブルマナー、それに社交ダンスまで猛勉強し、夫の片腕として立派に活躍する。 ・亮子はアーネスト・サトウに容姿を褒められた唯一の日本人女性ともいわれている。(このときのサトウの日記に「陸奥の二度目の夫人、若くてたいへんな美人、すずしい眼とすばらしい眉」とある) ・そして社交界入りした亮子は、やがて大山捨松（＊17）や岩倉具視（公家、政治家で明治維新十傑の一人）の娘で伯爵戸田氏共（うじたか）の夫人・極子（きわこ）とともに鹿鳴館の華」と呼ばれるようになる。 ・亮子、のちに日本赤十字社の正式社員として奉仕活動も行う
1887 年	宗光と亮子が、首相官邸で開かれた伊藤博文夫妻主催の仮装舞踏会に出席。この時、華族の戸田氏共（とだうじたか）夫妻も出席し、夫・氏共は太田道灌に、極子は山吹を捧げる賤女に扮した。この後しばらくして、この舞踏会で伊藤博文が極子に関係を迫ったとのスキャンダル（＊18）が新聞で報道された。	
1888 年	・4 月、伊藤は、総理大臣を辞して、二年後の国会開設に必要な憲法制定の草案作りに専念するため、枢密院議長に就任し、黒田清隆が総理大臣に就任する •5 月、宗光が黒田内閣の駐米公使として赴任するために出航する。 11 月、駐米公使兼駐メキシコ合衆国公使として、メキシコとの間に日本最初の平等条約である日墨修好通商条約を締結することに成功する。	
1889 年	・2 月、大日本帝国憲法が発布され「日米和親通商条約」を結ぶ見通しとなる。 ・12 月、大隈以外の全大臣が辞表を提出し、大隈は外務大臣を免官（＊19）となり、三条	・アメリカ政府の高官などを招待して、公使館主催の祝いの夜会で、娘清子と母子そろって、品のよい丁寧な英語で招待客をもてなす優雅さに、だれもがすっか

	実美が暫定内閣を成立したが、その後第 1 次山縣有朋内閣が成立。 ・12 月、宗光、山縣の要請を受けて佐藤愛麿を代理公使として帰国し、第 1 次山縣有朋（山縣は陸軍参謀総長や内閣総理大臣を歴任）内閣の農商務大臣に就任する	り感嘆し、たちまち評判となり、「ワシントン社交界の華」と呼ばれるようになった。
1890 年 明治 23 年	宗光は大臣在任中に第 1 回衆議院議員選挙に和歌山県第 1 区から出馬し、初当選を果たす	
1892 年	**宗光が第 2 次伊藤博文内閣の外務大臣に就任**する。 宗光は、井上馨や大隈重信と異なり、政略を仕掛けて外交をおこなおうとする。のちに陸奥外交と呼ばれることになる	・亮子、外務大臣夫人としてときには各公使館に挨拶めぐりをし、親睦会でもあるホームパーティを月に何度か官邸のホールで開く。招待日に招く各国公使夫妻、閣僚大臣夫妻の人選や・彼らのあいだが円滑に行くように配慮し、当をえた話題まで心得ていた。帝国ホテルで開催するときには新入りの自分が夜会を改革するのに途方に暮れたが大山捨松に相談に乗ってもらって無難に切り抜けた。
1893 年		・亮子の娘・清子が腸チフスを患い、亡くなる
1894 年	・7 月、宗光はイギリスと日英通商航海条約を締結し、幕末以来の不平等条約（＊20）の領事裁判権の撤廃に成功する。以後、アメリカ合衆国とも同様の条約に調印、ドイツ帝国、イタリア王国、フランスなどとも同様に条約を改正する。 ・朝鮮半島で甲午農民戦争（李氏王朝に対する農民運動）が始まると清の出兵に対抗して派兵。7 月 23 日に朝鮮王宮占拠による親日政権の樹立、25 日には豊島沖海戦により日清戦争を開始。イギリス、ロシアの中立化にも成功した。この開戦外交はイギリスとの協調を維持しつつ、対清強硬路線をすすめる陸軍参謀次長・川上総六（児玉源太郎とともに明治陸軍の三羽烏とされる）中将の戦略と気脈を通じたもので「陸奥外交」の名を生んだ。 ・7 月、日清戦争開戦 8 月から朝鮮半島を北上進撃し、更に遼東半島	

	に進撃し、交戦を続ける	
1895 年	・遼東半島での交戦で撃破した。さらに黄海の艦隊決戦で勝利した。 ・3 月、日清戦争は終戦し、講和条件の交渉を開始する。 ・4 月、**宗光、戦勝後は伊藤博文とともに全権として、日本側の勝利とみなす日清講和条約（下関条約）を調印**した。台湾、澎湖諸島、遼東半島を割譲され、莫大な賠償金を得たが、ロシア、ドイツ、フランスの遼東半島を清に返還するようにとの三国干渉に対し、宗光はやむを得ないとの立場に立たされる。 これ以前より宗光は肺結核を患っており、三国干渉（ロシアがフランスとドイツとつるんで、遼東半島を清に返せと日本に迫った干渉）が到来したとき、この難題をめぐって閣議が行われたのは、既に兵庫県舞子で療養生活に入っていた宗光の病床においてであった。 ・5 月、政府は賠償金 5600 万円を引き換えに、三国干渉に応じて、遼東半島を清に返還する	
1896 年	宗光は外務大臣を辞し、大磯別邸（聴漁荘）やハワイにて療養生活を送る。この間、雑誌『世界之日本』を発刊。	
1898 年 明治 28 年	・第 3 次伊藤内閣成立 ・8 月、**宗光が死去**	
1900　年 明治 30 年	・8 月、清国で義和団の乱勃発。日本を含む連合軍が北京総攻撃を開始	8 月、**亮子が 45 歳で死去**

＊1. アーネスト・サトウ

幕末期、長く日本に滞在したイギリスの外交官。のちに駐日公使となる。「もっとも日本を愛した外国人」と言っても過言ではない。計 25 年の日本滞在期間の中で、日本の言語をはじめ、歴史や慣習等を研究したことはよく知られている。外国人でありながら、日本を大きく変えることになる幕末に起こった 2 度の実戦（薩摩藩主島津茂久の父・島津久光の行列に遭遇した騎馬のイギリス人たちを薩摩藩士たちが殺傷（1 名死亡、2 名重傷）した生麦事件の解決と補償を艦隊の力を背景に迫るイギリスと、主権統治権のもとに兵制の近代化で培った実力でこの要求を拒否し防衛しようとする薩摩藩兵が、鹿児島湾で激突した薩英戦争、それと長州藩とイギリス・フランス・オランダ・アメリカ列強四国との間に起きた下関戦争）に参加して砲弾をくぐり、攘夷を唱える兵士たちからはつけ狙われ、白刃から身を守るということも経験した。

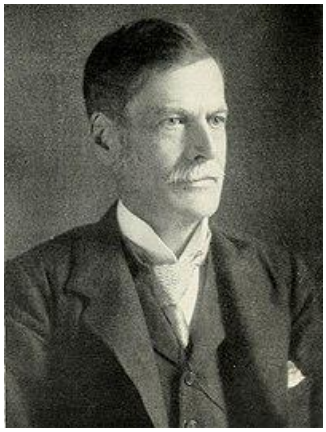
横浜の英字新聞に「日本の政治体制が天皇を元首とする諸侯連合であり、将軍は諸侯連合の

首席に過ぎない」と寄稿し、尊攘派が倒幕を視野に入れるきっかけを作ったさえ言われている。

日記に「陸奥の 2 度目の夫人、若くてたいへんな美人，すずしい眼とすばらしい眉」と書いている。

サトウは戸籍の上では生涯独身であったが、1871 年に武田兼（カネ）を内妻とし、3 人の子をもうけた

アーネスト・サトウ



サトウの内妻・武田兼

＊2. 王政復古の大号令

明治維新により武家政治を廃し君主政体に復した政治転換を指す。岩倉具視ら討幕派の公卿と尾張藩、越前藩、土佐藩、安芸藩、薩摩藩の 5 藩による政変。

京都御所にて明治天皇より勅令「王政復古の大号令」が発せられ、江戸幕府の廃止、同時に摂政、関白等の廃止と総裁、議定、参与の三職の設置が宣言され、新政府が成立した。

＊3. 鹿鳴館

1883 年に外務卿・井上馨による欧化政策の一環として建設された西洋館である。（現在の東京都千代田区内幸町にあった）

『詩経』の鹿鳴篇からとって、群臣嘉賓を招く場という意味で鹿鳴館と名づけられた。
欧米諸国との間の不平等条約を改正する目的で建設された。煉瓦造二階建、総建坪四百六十六坪、二階中央に大舞踏室があった。夜会や舞踏会、バザー、演奏会などが頻繁に催され社交場としてにぎわっていたが、男女がドレスを着てダンスに明け暮れる様を国辱であると悪評を放つ者も多かった。1887 年に条約改正の失敗で井上が辞職したことで、1890 年からは華族会館として使用されるようになった。1941 年に取り壊された。

＊4．何礼之（が　のりゆき）

肥前国長崎西上町に生まれの翻訳家、幕臣、官僚、教育者、唐通事。長崎で創設した塾は、塾生が 300 名を越え、維新後に活躍する多くの英才を輩出したが、その実績は幕末蘭学における緒方洪庵（人材育成をし、天然痘治療に大きく貢献し、日本の近代医学の祖といわれる）の適塾、伊東玄朴（蘭方医。江戸幕府奥医師まで登りつめた。名は淵。近代医学の祖で、官医界における蘭方の地位を確立した）の象先堂、佐倉の順天堂（江戸両国薬研堀で西洋外科の医学塾を開いていた佐藤（和田）泰然が，1843 年 8 月に下総佐倉（現，千葉県佐倉市）に移住し，佐倉藩の客分として佐倉本町に私立病院と学塾を設け順天堂と称した）と対比すべく、英学においては福沢諭吉の慶應義塾に匹敵するものであった。開成所（現・東京大学）教授を務め、大阪洋学校（現・京都大学）の創設者でもある。岩倉使節団の一員としても活躍し、自由民権運動に大きな影響を与えるなど、教育者、外交官、翻訳者として、様々な立場で日本の近代化に多大な貢献をした。内務省権大書記官、翻訳局長、元老院議官、貴族院議員も務めた。

＊5．後藤象二郎

土佐藩士・後藤正晴の長男として高知城下で生まれる。前藩主で事実上藩政を執っていた山内容堂の信頼を得て大監察や参長崎に出張、さらに上海を視察して海外貿易を研究した。坂本龍馬と深く交わるようになったのはこの頃である。1867 年 10 月 3 日に容堂とともに連署して大政奉還建白書を提出。10 月 14 日に慶喜がこれを受けて大政奉還を行った。これらの功により、後藤は中老格 700 石に加増され、役料 800 石を合わせて計 1,500 石に栄進する。

明治維新の功により、賞典禄として 1000 石を賜り、参与に任命され、大阪府知事など要職をいくつか歴任したが、征韓論で敗れ辞表を提出し、西郷隆盛、板垣退助らと共に下野する。その後、板垣退助らとともに愛国公党を組織、民撰議院設立建白書を提出し、大同団結運動を提唱した。党派を超えた活躍をする政治家で伯爵も授けられ、逓信相・農商務相を歴任しますが、収賄事件の責任を取り辞職し政治生命を終わらせることとなる。晩年は心臓病で療養していたが 1897 年（明治 30 年）60 歳で病死する。

後藤象二郎に対する人物評価
〇陸奥宗光
「試に彼と語りて瞑目せんか、彼は明治世界の産物にあらずして、殆ど晋末の六朝か、唐末の五代に成功すべき怪傑が、偶然その形を我国に現出したるに非ざるかを思い至るべし」
〇坂本龍馬
「彼は才物である。彼は我と時勢を談ずるに、一言も既往の歴史に渉らず、恩讐共に、忘るる如

く、杯酒の席に於ても、談柄を常に己れに属せしむ。真に才物である。我は、彼の才を利用して、吾党の志望を達せん」
○中岡慎太郎　（土佐の陸援隊隊長）
「西郷は一日に十五里歩むといえば必ず十五里歩み、後藤は二十里歩むと大法螺を吹いて、実は十六里しか歩けない。しかし、結局において、後藤は西郷よりも一里多く歩む人間だ」
○尾崎幸雄（政治家）
「ほんとの豪傑とは、こういう人かと思うような人であった。それにあれほどの豪傑であって、妙なことは、字が上手で、懐素流をよほどよく書いた。おそらく維新の豪傑で、あれほどの能書家は他にはあるまい」
○福沢諭吉
・「政府の現状を変え、諸悪をはらい清める、非常大胆の豪傑、満天下唯一の人物は後藤伯だけである」
・「若しも此人をして総理大臣の地位に当らしめ政府の全権を任せたらんには、国家百年の長計は兎も角も、踔励風発、満前の障害物を一掃して一時天下の耳目を一新するの快断、必ず見る可きものありしならん」
○中江兆民
「われらその大胆に服するなり。よく是れ勲を負うの人なり、爵を荷うの人なり、千金を擁するの人なり、姫美（きみ、身分の高い女性の敬称）を抱くの人なり」

＊6. 天満屋事件

海援隊士・陸援隊士らが京都油小路の旅籠・天満屋を襲撃して、紀州藩士三浦休太郎を襲い、警護していた新選組と戦った事件である。
経緯は、宗光が、当時有力な佐幕論者であった紀州藩士三浦休太郎が大垣藩士井田五臓らと共謀して京都にて不穏な動きをしていること、また坂本龍馬、中岡慎太郎の暗殺（近江屋事件）の黒幕が、伊呂波丸沈没事件の際に多額の弁償金を龍馬に支払わされた恨みを持つ紀州藩であるとの話を聞き、紀州藩公用人であった三浦休太郎を討つことを海援隊士・陸援隊士らと計画する。危険を感じた紀州藩は、会津藩を通して新選組に三浦の警護を依頼した。天満屋で三浦休太郎の護衛に新選組の斎藤一、大石鍬次郎ら 7 名がついた。1868 年 1 月 1 日、十津川郷士・中井庄五郎や、沢村惣之丞、陸奥宗光、岩村精一郎、大江卓ら海援隊・陸援隊総勢 16 名（15 名とも）が、三浦休太郎、新選組隊士らが天満屋 2 階にて酒宴を行っていたところを襲った。出会い頭に中井庄五郎が「三浦氏は其許か」というなり斬りつけ、三浦休太郎は頬等を負傷する。その後、両勢は入り乱れるが、燈火を消し、暗闇での戦闘となる。斎藤一は後から斬りかかられ命を落としそうになったが、梅戸勝之進が斎藤を守った。変を聞きつけた新選組、紀州藩が援助に向かったものの、着いた頃には陸奥らは素早くその場を引き揚げていた。

＊7. 王政復古に関する宗光の意見書

津本陽氏の推測によれば「後藤がイギリスの通訳のサトウにひき合わせようとしたのは、新政府における自分の立場を強化するため、宗光をサトウとイギリス公使のパークスに接近させ、少壮官僚としての足がかりを作らせるつもりだった」と。サトウの日記によれば、宗光の「外国公使

らが天皇をおしたてる新政府を承認するために、いかなる手続きをとればよいか」との質問に答えて「承認を求めて来るのは新政府からで、こちらがなすべきことではないのだ。元将軍はこののちも国政をおこなうと約束してくれており、新政府は外交について全く会談を求めてこないので、私たちは旧幕府と交流をつづけているのだ」と答えた。さらに「新政府が国政をおこなうのであれば、外交について責任を負うことを旧幕府に伝えたうえで、外国公使を御所に招き、天皇の地位を海外へあきらかにすべきだ」と。宗光は「自分は後藤の使者ではなく、自分の考えを申し上げるだけですが、まず皇族の一人が大坂城へきて、城内で外国代表と会い、徳川慶喜も同座して今後の外交政務の辞任を表明し、そのうえで皇族が王政復古の宣言をするのはいかがでしょうか」というとサトウは即座に同意した。さらに宗光はハリー・パークスとも面談した。そしてこの内容を岩倉具視にさしだした。岩倉具視は外国に対する新政府の提言をはじめて聞いたので、おおいによろこび、この意見を直ちに採用した。のちに書かれた「小伝」に記されている。

＊8．宗光が辞表を提出した背景

〇辞表の内容

つつしんで申し上げます。当今皇威は四海にかがやき、めでたくご親政がおこなわれるなかにも、能力のある者をすべて登用され、諸国の武士, 民間にいたるまで、その立場にかまうことなくお用いなされたのは、五か条の御誓文のご方針にもたがわず、野に遺賢なしとこのうえもなく見事なご政令で、民草はともどもに感じいっております。

しかるに私は若輩の書生でありながら抜擢していただき、外国事務権判事の重職に就任させていただき、深重の皇恩は山もなお低く海もなお浅しと存じ、士たるわが身の光栄は、なにをもって比類すればよいのでしょうか。

このようなご恩を思えば、粉骨砕身して皇恩の万分の一にも報い奉らなければなりません。人選は政務の根本で古今に通じてももっとも難事とされています。ことに源頼朝以来武家が掌握してきた大政を、皇威をよって朝廷に復し、後醍醐天皇のご憂苦なされた御志をつらぬこうとおはからいのさかんなとき、十代ナ安危のわかれめにあります。

この時において、愚かな者が僥倖によって重任ニつき、あるいは門地によって顕職につくようなことがあれば、今日の朝廷に不穏をもたらす一大事と存じます。

いま朝廷緒官には賢者が在職し、選挙に過ちがないとは存じますが、私自身の才の乏しきをかえりみて推測すれば、千人のうちあるいは一、二が誤って選ばれた者がいるやも知れず、愚人が在職し遺賢が在野する害が重大ではないとはいえません。

その利害得失はわずかではありません。ついては私のように才なく卑小な者は、僥倖により在職するもっとも極端な者です。しかしたやすく辞職すればせっかくお選びいただいた立場を汚し奉ることになり、進退をどうすべきか度を失っております。

しかしご新政をおこなわれるうえで、私のような愚者は明鏡の埃のようになりはてますので、過日伊達少将殿（宗城）まで辞任を嘆願に参りましたが、お聞きいれなく、やむをえずふたたび願いでるしだいです。赤心の志を深くご麟察ください。

〇辞表の真意

門閥、藩閥の庇護のもとに新政府の役職にくいいり、役得をむさぼる、無能のやからがはびこる実態を指摘することにあった。

宗光の上書は世上で評判となり、門閥の人事方針により高位に就いた者を暗に指弾する内容に同感する者が多く、木版刷りで巷間に配らばれたほどだった。
〇政府の対応
上書を黙殺し、外国事務局権判事の職に加え、会計官権判事就任を命じた。

＊9. 星亨

英学者、弁護士、政治家。
　江戸の無位無官の左官職人の子として生まれ、医学、英学（英語）や法律などの勉学に励みながら英語教師から政治家への転身を遂げた。
明治時代の半ば頃までは、有力政治家や高級官僚・軍人官僚の大部分が、明治維新に功績のあった薩長土肥の出身者で占められていた。長閥・薩閥が政界を縦横する中、板垣退助を筆頭とする立憲自由党においてその政治的才覚を遺憾なく発揮し、藩閥政府が政党の言論を弾圧する空気の中で国会開設（1890 年）と政党政治の基盤作りにも尽力し、日本型政党政治の原型を築いたとされる。その逞しい政治手腕から「おしとおる」と渾名された。
　一方、収賄などの噂も絶えなかったが、星の活躍への嫉妬によるもので本人は金銭に無頓着であった。たとえ星自身が金銭的に潔白であるとしても、東京市政の疑獄の数々には星の責任も大きいと言われている。
1900 年、伊藤博文ともに立憲政友会を結党した。同年の第 4 次伊藤内閣で逓信相として初入閣したが、東京市疑獄事件の中心人物と目され辞職。
　1901 年、教育家で剣術家の伊庭想太郎に公衆の面前で刺殺された。伊庭は刺殺後、天下のためであると怒号を上げて、持参した斬奸状なる書状を読み上げたという。
　エピソードとしては、大蔵省出仕時の 1872 年 6 月、車夫を殴打し邏卒に乱暴したとして、閉門百日を命じられ、8 月に大蔵省も失職した。上京した両親は、失職した星が大勢の食客を抱えているのに呆れ、「この際書生を断ってはどうだ」と説いたが、有意な人材だから及ぶ限り養うと言って聞かず、愛蔵の蔵書も売り払って食費に充てたという。星の閉門が解けた時、陸奥宗光が生活を変えさせるために、自らの屋敷に移るよう勧め、星亨が「書生がいるから」と断ると陸奥は「書生たちも一緒に来てもかまわぬ」といい、「食客の食客」という世間に例のない体裁で陸奥屋敷に移った。

〇宗光との関係
宗光に英語を教えた。宗光が牢獄にいたときに星亨が会いに行っている。そして宗光が神奈川県令のときに星亨を大蔵省租税寮御雇として引き上げた。
陸奥は星を引き立てた恩人であり、陸奥との関係なくして星の行動は語れない。星の自由党入党は弁護士として成功していた当時の星にとって積極的な動機はなく、獄中にあった陸奥の出獄後の地ならしであったというのが有力である。
　第三議会に当たり議長としては河野広中が有望視されていたが、陸奥の意を汲んだ岡崎邦輔の奔走により星の衆議院議長が実現した。星は陸奥の指示により、松方内閣と厳しく対決、内閣弾劾決議案を可決、軍艦建造費ほかの新事業費は全額削除となり、松方内閣は崩壊した。藩閥政府は星の主導する自由党を抑えるには明治天皇から忌避されていた陸奥の力を借りるしかないと

悟る。星は原敬（第 19 代総理大臣）と違い陸奥に心服してはいなかったが、恩義は感じ比較的愚直に服しており、リアリスト陸奥に利用されていたとも言える。
・宗光が神奈川県令として再度出仕したときに、星亨を大蔵省租税寮御雇として引き上げる。
・大蔵省租税頭兼任となった陸奥の引き立てにより、同年に大蔵省雇、9 月には租税寮七等出仕となり、1874 年横浜税関長（租税権助・従六位）に抜擢された

＊10．小清（こせい、板垣清女）

芸妓。のち板垣退助の権妻（妾）で板垣清女と呼ばれる。幼くして奉公に出て、のち新橋金春通りで評判の芸者となる。この頃の名は「小清（こせい）」。絵草子に描かれると、飛ぶよう売れて絵草子屋をかなり儲けさせたという。小清時代の写真も現存している。1872 年、板垣退助に落籍されて退郭。当時は戸籍に「権妻」を記す欄があった為、正式に板垣家の戸籍に入籍している戸籍名は板垣せい。築地の板垣邸で暮らし、同年に女児を産む。1874 年、危篤となり薬石効むなしく清女は病死した。享年 20。普段気丈な板垣もこの時ばかりは落胆し、布団にもぐって大泣きしたという逸話が伝わっている。板垣は、清女の為に立派な墓を建てた。

＊11. 征韓論争

征韓論の考え方でも江藤新平や板垣退助のように本当に戦争も辞さないほどボコボコにするべきのような考え方から、西郷隆盛みたいなあくまでも交渉で解決しましょうのような考え方に分かれていた。
そんなときにちょうど欧米諸国から帰った岩倉使節団は、これの真反対の考え方で『今は日本を近代化する方が先で、朝鮮に武力を使うのは後回しにする』という思いがあった。さらに仮に西郷隆盛が交渉してもうまく行くことはほとんどなく、逆に西郷隆盛が暗殺されてしまう可能性もあると予想していた。
こうして意見が割れた政府ではいろいろないざこざがあり、1873 年、最終的には西郷隆盛や板垣退助を始め 600 人もの政府の官僚が辞める大事態となる。
これを「明治六年の政変」（征韓論政変とも）と呼ぶ。

＊12. 宗光の意見書「日本人」

明治政府は、藩閥政府になりはてている。「日本は日本人の日本である。薩長の日本ではない」。薩長藩閥政府から政治を取り戻す者こそ日本人である。という主旨の意見書

＊13．政府要人の暗殺計画

『日本及日本人』所載「雲間寸観」によれば、林有造・大江卓は暗殺すべき人物として秘簿をつくった。そのなかには大隈重信の名もあったが、陸奥宗光はこれを一見して、一人重要な人間が抜けていると言い、自ら筆をとって伊藤博文の名を加えた。林と大江は、陸奥宗光は平生より伊藤と親しいから、志成った場合は伊藤博文を推してもよいだろうと考えていたので、陸奥宗光が伊藤博文の名を加えたのを見て、ひそかに驚いたという。

＊14. 宗光、政府転覆計画に関与

自由民権運動の中心となった政治団体である土佐立志社の林有造・大江卓らはその混乱に乗じ、要人の暗殺や挙兵を企てていた。宗光は、坂本龍馬がつくった海援隊の隊士であったこともあって土佐系人脈とは関係が深く、そのつながりで、密謀を漏らされていた。

しかし、宗光は元老院幹事の身ながら、その計画を政府には報告せず、むしろ彼らにこう言った。「この機を逸すべからず。この好機を逸すれば大事成る可からず」（国家主義者・右翼運動家・アジア主義者で大日本生産党総裁の内田良平が 1901 年に設立した黒竜会によって編纂、発行された『西南記伝』下巻１より）

＊15．北海道開拓使官有物払下げ事件

北海道開拓使長官であった黒田清隆が、開拓使の資産であった工場や土地などの官有物を安価、無利子で払い下げることを決定したところ、世論の厳しい批判を浴び、払い下げ中止となった事件を指す。参議大隈重が情報を漏洩したとして政府から追放される「明治十四年の政変」につながる。

払い下げが閣議では採択されたが、『東京横浜毎日新聞』において、「関西貿易商会の近状」と題した記事で払下げの事案が暴露され、黒田が同郷（薩摩藩）の五代友厚に利益供与を行っているとの報道がなされた。リークしたのは大隈・福沢・三菱であるとの陰謀説を信じる伊藤・井上・山縣有朋・山田顕義・西郷らは大隈の排除に向けて動き出し、閣議で大隈の罷免と払下げの中止を決定する。そして大隈が政府から追放される。

リークした人物は藪の中だが、国会開設急進派の大隈が、国会を開設すればこのような事件を防げるようになるとし、自らの意見を通すために払い下げのことを新聞社に教えて国民の政府批判をあおったとされているが、後年大隈自身は『大隈侯昔日譚』において関与を否定している。

払下げ先は五代らの関西貿易社ではなく開拓使大書記官であった安田定則ら開拓使官僚が設立した北海社で、大隈は閣議で賛成している。あえて払下げ先が黒田と同郷の五代だと変えてリークする理由が大隈には見当たらない。リークした人物が払下げ先を五代としたのには後の政局を睨んだ人物の悪意が感じられる。従いリークしたのは大隈では無かったと思われる。リークした人物の意図は不明だが、結果として大隈を糾弾していた側の薩摩閥の黒田も政府内での影響力が低下し、肥前藩閥の大隈が下野したことにより政府の中心は長州閥の伊藤となっていった。歴史的にはそのことにより利益を得る側が犯人であることが多いが、この事変も例外では無かろうと筆者は思う。

＊16．伊藤梅子

1848 年、木田久兵衛の長女として長門国（現山口県）で誕生。赤間関（現下関）稲荷町の置屋「いろは楼」の養女となり、芸妓となって「小梅」を名乗る。1864 年頃、イギリスからの帰国間もない伊藤博文と出会う。梅子は文字を知らなかったが、博文に手紙を書きたいと思って手習いをはじめたという。二人の仲が深まり、博文は結婚していた入江九一と野村靖（政治家）の妹であるすみ子と離婚し、梅子が継妻となった。梅子は克己心の強い女性だったとされ、下田歌子（明治に活躍した教育者・歌人）に和歌を学んだり、英語を習得したりして教養を身につけ、身だしなみにも気を払うなど、婦徳（婦人として守るべき徳義）の鑑とも称されていたといわれる。鹿鳴館外交では政府高官の妻として率先して外交官たちをもてなし、日本で初めてのバザー、婦人慈善

会を積極的に推進し、その収益金を有志共立東京病院などに寄付し、社会福祉に貢献した。
　1909 年に博文が暗殺されこの世を去るが、その際に梅子は涙を見せずに気丈にふるまっていたが、自室にて「国のため光をそえてゆきましし 君とし思へどかなしかりけり」という歌を詠み、夫の死を悼んだとされる。
葉室麟は著書『暁天の星』の中で、梅子のこのような逸話を紹介している。
「鹿鳴館では、婦人服はローブ・デコルテ（ネックラインが深く大きくカットされ、肩および背中と胸の上部を露出したノースリーブのドレス）の事、男子着服は燕尾服の事と定められていたため、梅子は宮中の女官たちに洋服を取り入れようと努力した。裁縫師ですら直接ふれることが出来ない皇后のサイズを測り、ドレスを作った。何事にも熱心な梅子は明治天皇や皇后からも信頼を得た。もっとも鉄火肌なところがあり、伊藤と親しい政治家が屋敷に訪れるといつも内緒で花札をして、賭博嫌いの伊藤を困惑させた。また、伊藤と碁を打っても勝つのはいつも梅子だった」と書いている。葉室麟は根拠があったうえでこのように紹介しているのだろう。

伊藤梅子

伊藤博文

＊17. 大山捨松

米国留学時代、右端が 12 歳の捨松

会津藩家老山川尚江の末娘で、幼名を咲子といった。幼少のころ会津戦争を経験し、陸奥，斗南への移住などの苦難にあった。1871 年、北海道開拓使派遣の官費留学生の一人として、津田梅子らとともに渡米した。牧師の家に寄宿して地元の高校を卒業、バッカ―大学の正規課程を修めた。

大学の卒業式に際しては卒業生総代（10 人）の一人に選ばれ、卒業論文『イギリスの対日外交政策』をもとにした講演を行い、ニューヨーク・タイムズが「完璧なまでにイギリスの保守主義政策を理解し、アメリカの自由と友愛の精神に対して惜しみない賛辞を送っている」と論評した。さらに、コネティカットの看護婦養成学校で研修を受けた。帰国後、参議、陸軍卿の大山巌と結婚した。美貌で日本人離れした体型をもっており、アメリカ留学で洗練された語学力でまさに「鹿鳴館の華」だった。看護婦教育・女子教育への支援に尽力した。

＊18．伊藤博文と戸田極子のスキャンダル

鹿鳴館時代の極子

極子は華族・岩倉具視侯爵の令嬢で、元大垣藩藩主・戸田氏共（うじたか）伯爵の夫人。評判の美女であったのみならず、早くから教育を受けたため英語とダンスに堪能であり、外国人たちとも物怖じせず交わることが出来る女性であった。このため、1883 年からの鹿鳴館において、陸奥亮子と共に「鹿鳴館の華」と呼ばれた。

葉室麟著「暁天の星」によれば

「氏共と亮子が首相の伊藤博文が官邸で開催した仮装舞踏会に出席、夫・氏共は太田道灌に、極子は山吹を捧げる賤女に扮した。この後しばらくして、伊藤博文が極子を裏庭の茂みに誘い込んでいかがわしい行為に及ぼうと乱暴したので、極子が裸足で逃げだしたという奇怪なスキャンダルが諸新聞で報道された。このスキャンダルは捏造された可能性が高いが、この醜聞で国民から一挙に怨嗟の声が上がったため、鹿鳴館はわずか 5 年あまりでその幕を閉じた。」
大路和子著「相思空しく」によれば
「極子を伊藤が別室に引き込んで暴行したという噂がたった。新聞にも報道され、髪を乱して逃げ去る極子を見たという者も現れた。そんな破廉恥極まる噂が、ほとんど壊滅したはずの自由民権運動を再興させることになり、反政府運動の大きなうねりとなっていた」と。
　仮装会での極子と伊藤の話は真偽のほどが分からないが‘火の無いところに煙が立たず’であろう。反政府運動者や鹿鳴館に反対する者が捏造し、新聞ネタにした可能性は否定できないだろうし、伊藤と極子に何等かの関係が本当にあったとすれば、新聞報道に反論すると藪蛇になる可能性がありので反論しなかったということはあり得るのだろう。

＊19．大隈重信の免官

条約改正案の外国人判事を導入するという条約案が「官吏は日本国籍保持者に限る」とした大日憲法にするという指摘が陸奥宗光駐米公使より行われたが、外務大臣・大隈は裁判所構成報の附則から違憲ではないと主張するが、井上毅法制局長官からも同様の指摘が行われた。山田顕義法務大臣は外国人裁判官に日本国籍を取らせる帰化法を提案し、伊藤枢密院議長、井上馨農商務大臣もこれに同意して条約改正交渉の施行を遅らせるよう求めた。大隈は帰化法の採用には応じたものの、条約改正交渉の継続を主張した。大隈を支持するのは黒田首相と榎本武揚文部大臣のみであり、また世論も大隈の条約改正に批判の声を上げた。10 月、国家主義組織玄洋社の一員である来島恒喜に爆弾による襲撃（大隈重信遭難事件）を受け、一命はとりとめたものの、右脚を大腿下三分の一で切断することとなった。大隈を除く閣僚と黒田総理大臣が辞表を提出し、大隈は辞任。

＊20．不平等条約

幕末の 1858 年に江戸幕府がアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスの 5 ヵ国それぞれと結んだ条約（日米和親条約や日米修好通商条約等）に在留外国人に治外法権（在留国の法制が一切及ばないこと）を認めさせられることや関税自主権が日本にないことで不平等条約という

3．宗光の評価

著名人の評価を紹介する。

〇後世の著名人

〇作家・津本陽が著書『荒ぶる波濤（幕末の快男児陸奥陽之助)』の中で、小次郎（宗光）の人物像を次のように書いている。

小次郎（宗光）はオランダ語、数学、航海術など、学問の分野では恐るべき才能を著したが、撃剣、柔術にはまったく興味を示さなかった。「俺は他人と争いごとをするのが嫌いだ。喧嘩に勝ったところで、何の利益があるというのだ」諸藩から集まった塾生は、利発な者ばかりであったが、学力ではとても敵わない小次郎を、武士にあるまじき柔弱であると蔑視しようとした。

小次郎は高野山の寺男として江戸へ遊学した頃から、医者の下僕となり,漢学塾の下男としてはたらいてきた経験があるので、武士の子弟として生活してきた塾生たちと、物事のうけとりかたが違っていた。

人の表裏を観察するにも、過去の経験がつくりだしたものさしで、計ろうとする。

経験のない事柄は理解できないので、拒否しようとするのである。小次郎は女性とねんごろになる手管に長じている。物品を買うときも、実に巧みな値切りかたをする。それは江戸という世界一の大消費都市の、下層社会で生きてゆくために身につけた知恵であったが、いなかの侍社会出身の塾の若侍たちは、そんな小次郎を憎み、いつか「嘘つきの小次郎」という渾名でひそかに呼びあうになった。（大藩の重臣の息子が脱藩して尊王の志を果たそうとしていることが嘘に違いないと思われた。

〇（葉室麟著；『暁天の星』）の中で次のように書いている。

勝麟太郎らが大坂から京都にむかう三十石船のなかで、お供をしていた坂本龍馬が他の塾生に聞こえないように小次郎の耳もとでささやかしている。
「お前んは近頃、塾中で嘘つきの小次郎と呼ばれんちゅうようだが、気にせんときや。お前んの頭がえいと、先生も認めちゅう。沢村惣之丞も、お前んが頭脳のすぐれた秀才じゃといいよるき、阿呆どものいうが気にせんときや」

〇当時の著名人の宗光にたいする評価

〇勝海舟

・陸奥宗光はおれが神戸の海軍塾で育てた腕白者であった。（中略）身の丈にも似合わぬ腰の物を伊達に差していかにも小才子（その場に合わせて、うまく始末をつける能力を持つ者）らしい風だった。

・「あれも一世の人豪（器量がすぐれた人物、豪傑）だ。しかし陸奥は、人の部下について、その幕僚となるに適した人物で、幕僚に長としてこれを統率するには不適当であった。あの男は、統御もしその人を得たら、十分才を揮（ふる）うけれども、その人を得なければ、不平の親玉になって、眼下に統領を踏みつける人物だ。あれがもし大久保（利通）の下に属したら、十分才を揮い得たであろう」（氷川清話）

〇渋沢栄一

・「外務大臣をなされたことのある陸奥宗光伯は、平岡円四郎（徳川慶喜の小姓を務め、慶喜に一橋家の家老並みに重用された）と殆ど全く同型の人で、一を聞いて十を知る機敏な頭脳を持つて居られたかのやうに思はれる。兎角一を聞いて十を知る質の人は、余りにさき廻りをするので、他人に厭やがれる[厭やがられる]傾きのあるものだが、陸奥伯には爾んな傾向がなく至つて交際ひ易い人であつた。随つて平岡円四郎のやうに非業の最期（暗殺）をも遂げず、畳の上で死ぬことが出来たのである。」

（平岡円四郎について、平岡の推薦で一橋家の家臣に取り立てられた経験を持つ渋沢栄一は次のように述べている。「この人は全く以て一を聞いて十を知るといふ質で、客が来ると其顔色を見た丈けでも早や、何の用事で来たのか、チヤンと察するほどのものであつた。然し、斯る性質の人は、余りに前途が見え過ぎて、兎角他人のさき回りばかりを為すことになるから、自然、他人に嫌はれ、往々にして非業の最期を遂げたりなぞ致すものである。平岡が水戸浪士の為に暗殺せられてしまうやうになつたのも、一を聞いて十を知る能力のあるにまかせ、余りに他人のさき廻りばかりした結果では無からうかとも思ふ。」）

・「伯も平岡円四郎のやうに、一寸したことを聞いた丈けでそれからそれへと考へを進めて往き、事を未然に察知するまでの才智のあつた人だが、孰らかと謂へば金銭と権勢とに動かされ易く、一身の利達を謀らんが為めには形勢を察して金銭と権勢とのあるところに就くを辞さなかつたらしく、大丈夫の志が無かつた人のやうに思へる。それから妙に他人を凌ぐやうな傾向があつて、談話などでも自分の才智に任せて対手を圧迫して来る如き気味合を示したものである。之が為め、多少他人から厭がられた]こともあらうが、交際は至つて如才のなかつた方である」

・「陸奥宗光伯も、前条に談話した通りで、御自身には優れた才識のあらせられた人で、権勢と金力とのあるところを見て之に就く事にかけては誠に敏捷であつたが、人物を鑑別する力に於ては、余り優れた方であつたとは申上げかねるやうに思へる。随つて、陸奥伯の交はられた人や用ひられた人は、必ずしも善良誠実の人ばかりであつたやうにも思へぬ。」

〇中江兆民（自由民権運動の精神的な指導者

「機智豊衍にして機鋒靈活なり。陸奥君と機智を闘わし機鋒を競い、陸奥君の奇声とその洪大を較らぶる者は国会議員中、果て誰某成るべきや。

〇西園寺公望（公家で、政治家、大臣）

（宗光は）「才子で敏感すぎるから、一時失脚したのだね。西南役の折、もしかすると西郷が勝つかも知れんから、幾分その場合に処する用意をしておこうとした」と述べている。佐々木雄一は陸奥が大々的に武装反乱を起こそうとしたのではなく、才子で敏感すぎ、不遇感があるなかで、何かあった場合に処する用意をしておこう、機に乗じよう、と考えたのだという。

〇関直彦（ジャーナリスト、政治家、弁護士。 東京日日新聞 社長）

・「龍馬の薫陶によって陸奥も彼だけの人物になったと言っても可い位で、平生、龍馬は陸奥を評して『彼は非常な才物である。外の者は大小を取り上げれば殆ど食うにも困る者ばかりだが、陸奥だけは上手に世渡りをして行ける』と言っていた」

・「剃刀大臣といわれしだけありて、機略縦横、電光石火の立回りに妙を得た人であった上にも、また弁舌の雄として世に認められたる人である。」

・「陸奥伯は子供の時より涎を垂らすの癖あり。堂々たる国務大臣として、条約改正に、各国の政治家を向こうに回し、折衝応答の時にも、また、日清講和談判に李鴻章を悩ましたる時にも相変わらずだらだら涎を垂らしつつ議論せられたるものならん。伯は、常に葉巻煙草を吸わるるが、その半ばは涎に濡れて、火の消ゆるを常とす。偉人にも妙な癖があるものかな。」

4. さいごに

宗光は、特異で、複雑な性格で稀有な才能を有する人物ですが、周囲から「嘘つき小次郎」、「カミソリ大臣」と呼ばれたことや宗光や亮子の歴史小説『叛骨　陸奥宗光の生涯』、『荒ぶる波濤』、『暁天の星』、『相思空しく』の題名から、複雑な性格で類まれな才能を有した人物像が思い浮かびます。しかし凡人の理解をはるかに超えた人物であり、筆者はその人物像をとても筆舌に尽くしがたいので、人物像は 3 項で紹介した要人らの評価に任せるとします。更には上記の書籍をご覧になって頂きたいと思います。いずれもほぼ史料に則していて、史料が無いところは連想を入れ、宗光や亮子の人物像を浮かび上がらせています。

亮子は元芸妓ですが、当時芸妓と結婚した政治家は珍しくなかったようです。芸妓は、芸事に精通していただけでなく、当時の女性の中では世相や政治にも精通した最高レベルの知識人であっただろうし、政治家の夫人は社交の場やバザー等の慈善事業活動や社会福祉活動などで夫を卒なくサポートしなければならないですが、当時の女性の中ではそういうことに最も秀でていたのが芸妓だったのかもしれません。

他の政府要人の事例は、

・後藤象二郎の後添いの雪子；京の先斗町に出ていた芸妓お雪
・伊藤博文の後添いの梅子；赤間関(下関)の置屋「いろは楼」の養女となり、芸妓となった「小梅」
・木戸孝允の妻の松子；京都三本木の芸妓幾松（いくまつ）
・山縣有朋；最初の妻の友子没後、芸者の貞子という女性を妻にしたが、入籍することは無かった。
・板垣退助の権妻（妾）の板垣清女；幼くして奉公に出て、のち新橋金春通りで評判の芸者「小清」

亮子の人物像は、日本に計 25 年も滞在したイギリスの通訳（のちに外交官）のアーネスト・サトウが容姿を褒めた唯一の日本人女性であること、また「ワシントン社交界で品のよい丁寧な英語で招待客をもてなす優雅さにだれもがすっかり感嘆し、たちまち評判となり、そして『ワシントン社交界の華』と呼ばれるようになった」に言い尽くされているでしょう。

参考資料

・津本陽著『荒ぶる波濤』
・津本陽著『叛骨 陸奥宗光の生涯』
・葉室麟著『暁天の星』
・大路和子著『相思空しく』
・ウイキペディア

以上